様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月８日

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520314
研究課題名（和文）：アジア諸言語における複合動詞構文に関する認知類型論的対照研究
研究課題名（英文）:A typological study of compound verbs construction in Asian languages

研究代表者:
PARDESHI P. V. (PARDESHI PRASHANT)
神戸大学・人文学研究科・講師
研究者番号：00374984

研究成果の概要：アジア諸語の特徴の一つに動詞連結（V1+V2)から構成される複合動詞構文がある。本研究は日本語、韓国語、ヒンディー語とマラーティー語における複合動詞構文を対照させ，その類似点や相違点を明らかにすることを目的で行われた。その成果は①複合動詞の歴史的な発達過程は通言語的に類似しているもののその速度が言語によって異なること、②複合動詞の使用がジャンルに左右されることが明らかになったことである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：言語類型論、意味論、複合動詞構文、文法化、通時的研究、共時的研究

１．研究開始当初の背景

Masica (1976)はそのパイオニア的な研究において、東北・中央・南アジア諸語といった系統が異なる言語で共有される言語現象の一つとして動詞連結（V1+V2）から構成される複合動詞（compound verb、以下 CV と呼ぶ）を挙げている。CV とは二つの要素から構成される述語である。第一動詞（V1）は連用形やテ形のような不定形であり、第二動詞（V2）は定形である。前者は主動詞（main, polar verb, primary verb）と呼ばれ制約のない開いた類であるのに対して、後者は助動詞（explicator verb, light verb, secondary verb, intensifier, operator など）と呼ばれる一群の動詞（GO, COME, GIVE, TAKE, RISE, FALL, THROW, PUT, SIT など）から構成される閉じた類である。V2 の多くは移動・姿勢・位置変化などを表わすため vector verb とも呼ばれ、CV にアスペクト的意味をはじめ直示・様態・話者の主観的な態度といった意味を付け加える。(V2 を有する）CV 文（例：太郎が朝寝坊をしてしまった）は V1 のみの文

（例：太郎が朝寝坊をした）と対をなし、両者の意味的な違いは CV を持たない英語のような言語では説明しにくいものである。

南アジアでは系統的に異なる言語が共有する言語現象として，複合動詞構文が盛んに研究されている(Hook 1974, Masica 1976, 他)。一方，東アジア諸語に属する日本語や韓国語でも複合動詞構文に関する研究は進んでいる（影山 1993, Matsumoto 1996, 姫野 1999, Lee 1993, 他）が，この両者の対照研究はほとんどなされていない。

２．研究の目的

本研究は地理的にも隣接せず，系統的にも異なる南アジア諸語（マラーティー語，ヒンディー語）と東アジア諸語（日本語，韓国語）における複合動詞構文を対照させ，その類似点や相違点を明らかにすることを目的とするものである。具体的に、本研究の目標は（１）複合動詞の歴史的な発達過程を解明、（２）アジア諸語における複合動詞の構成素（V1+V2）の組み合わせに見られる共起制限の共時的な実態調査、（３）複合動詞の使用におけるジャンルの影響の解明である。

３．研究の方法

本研究は共時的および通時的なアプローチを通じて（I）共時的な観点から複合動詞構文における普遍性と個別性を解明，また（ＩＩ）通時的な観点からは，その誕生・発達過程の追求を通して言語変化における普遍性と個別性の解明を目指す。

４．研究成果

本研究の成果を上記の研究目的（１）～（３）に対応するものの順に簡潔に紹介する。

（１）複合動詞の歴史的な発達過程を解明

複合動詞の構成素であるV2はその語彙的な意味を徐々に失い、文法的な意味を獲得していく。この言語変化（文法化）の過程は通時的なデータに基づいて解明することは可能である。Butt は最近の一連研究(Butt 2003, Butt & Geuder 2003, Butt & Tantos 2004)でアスペクトや法を表わす助動詞（auxiliary verbs）の歴史的な発達の過程と複合動詞の構成素であるV2 (vector verbs)のそれは質的に違うことを論じている。本研究の代表者（Pardeshi）と研究協力者（Hook）は共同研究を行い、Buttの仮設は正しくないことを論じ、アスペクトや法を表わす助動詞（auxiliary verbs）の歴史的な発達の過程と複合動詞の構成素であるV2 (vector verbs)のそれは質的に同じであることを論じている。本研究は口頭発表として公開されたものである。(学会発表のPrashant Pardeshi, Peter Hook, and Sung-Yeo Chung. 2006, Peter Hook and Prashant Pardeshi. 2008a, Peter Hook and Prashant Pardeshi. 2008b を参照)

（２）アジア諸語における複合動詞の構成素（V1+V2）の組み合わせに見られる共起制限の共時的な実態調査

本研究は東・南・中央アジアといった異なる地域で話され、異なる語族に属するアジア諸語における「V1(不定形) ＋PUT/KEEP (定形)」複合動詞構文に焦点を当て、「PUT/KEEP」に相当する動詞の vector verb としての用法の記述を行い、(V1+V2) の組み合わせに見られる共起制限に関して言語間に見られる類似点や相違点を明らかにする。調査対象の言語は日本語・韓国語・モンゴル語（東アジア)、ヒンディー語、マラーティー語、テルグ語、タミール語、ネパール語、ネワール語、シンハラ語（南アジア)、キリギス語、ウズベク語、タージク語（中央アジア）である。

日本語の「置く」はvector verbとして他動詞、本動詞「置く」、摂取動詞、再帰動詞、意志的自動詞に加え、数は少ないものの非意志的自動詞とも共起可能であり、その際phonetic attritionも起こす。これに対し、南アジアの多くの言語では「PUT/KEEP」に相当するV2 は基本的に他動詞としか共起せず、phonetic attritionも起こさない。中央アジアの言語はその中間の位置を示す。以上の類似・相違点を踏まえ、本研究は日本語の「置く」の文法化・意味的漂白化の度合いは他のアジア諸語に比べて高いと主張している。本研究は日本言語学会第１３５回大会、The 4th conference on “New Reflections on GrammaticalizationおよびWorkshop on Compound Verbs in the Indo-Turanian Linguistic Areaで口頭発表として公開されたものである。学（会発表のパルデシ・プラシャント 2007, Pardeshi 2008a, 2008bを参照)

（３）複合動詞の使用におけるジャンルの影響の解明

ヒンディー語・マラーティー語・日本語・韓国語における CV に関しては、その形態的・統語的・意味的特徴、歴史的な変遷、地理的な分布などについての先行研究は数多く存在する（Hook 1974, 2001b, Masica 1976, Abbi and Gopalkrishanan 1991, Verma (ed.) 1993, Butt 1995, 2003, Kageyama 1993, Matsumoto 1998, Himeno 1999, Rhee 1996 など）が、その使用におけるジャンルの影響に関しては、Burton-Page 1957, Hacker 1958, Hook

2001a を除き研究が見当たらない。本研究では、法的文章（憲法）と文学作品（小説）という異なったジャンルのテキストを対象とし、ヒンディー語・マラーティー語・日本語・韓国語における CV の対照研究を通じて、CV の使用におけるジャンルの影響を明らかにする。

四言語で共通しているのは、文学作品において CV の使用頻度が法的文章よりはるかに高い点である。CV はテキストの構成部分間の繋がりを整える機能を果たすと考えられ、その観点からテキストのエピソード性が乏しい憲法のような法的文章において、CV が好まれないことが自然に理解できる。また、客観的な文章である憲法においては、話者の主観的な態度を表わす V2（例えばヒンディー語の Daalnaa ‘to throw’, マラーティー語の basNe ‘to sit’, 日本語の「しまう」‘put/pack away’ 、韓国語の pelita ‘throw’）を含む CV が全く使用されていないことも当然と言えよう。

二つの出来事の完了の順番を対比したコンテクストでは、ヒンディー語では、時間的に先に起こった方がCVで表現される傾向が非常に強く、そのような文脈では小説のみならず憲法においてもCVが使用される。しかし、他の言語では、同様の文脈で小説ではCVの使用は許容されるものの、憲法では許容されない。以上のように、本研究から浮き彫りになる、CVの使用におけるジャンルの影響に関する言語間の類似点・相違点は、東北・中央・南アジア諸語におけるCVの包括的な理解に貢献するものと言える。（学会発表の Prashant Pardeshi, Peter Hook and Sung-Yeo Chung. 2008a, 2008bを参照）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① Prashant Pardeshi, Peter Hook and Sung-Yeo Chung. 2008a. “The influence of genre on the occurrence of the compound verb: A case study from Hindi, Marathi, Japanese and Korean.” Proceedings of the Thirty-third Annual Meeting *Kansai Linguistic Society (KLS) 29* (2009). Pp.56-66. 査読無し

②パルデシ・プラシャント. 2007. 「放っておけない「Ｖ－テオク」構文―東・南・中央アジア諸語における「PUT/KEEP」の文法化の記述的研究―」『日本言語学会　第 135 回大会予稿集』, Pp.298-303.　査読無し

〔学会発表〕（計　８　件）

①Prashant Pardeshi, Peter Hook and Sung-Yeo Chung. 2008b. “The Compound Verb in the Constitutions of India, Japan and Korea.” Paper presented at the Workshop on Compound Verbs in the Indo-Turanian Linguistic Area, Research Center for Linguistic Typology (RCLT), La Trobe University, Melbourne, Australia, 19th December, 2008.

②Peter Hook and Prashant Pardeshi. 2008b. “Are Vector Verbs immune to evolution?” Paper presented at the Workshop on Compound Verbs in the Indo-Turanian Linguistic Area, Research Center for Linguistic Typology (RCLT), La Trobe University, Melbourne, Australia, 19th December, 2008.

③Prashant Pardeshi. 2008b. “Compound Verbs involving ″PUT/KEEP″ as a vector verb in Northeast, Central and South Asian languages: An areal-typological study.” Paper presented at the Workshop on Compound Verbs in the Indo-Turanian Linguistic Area, Research Center for Linguistic Typology (RCLT), La Trobe University, Melbourne, Australia, 19th December, 2008.

④Peter Hook and Prashant Pardeshi. 2008a. “Inflation in the Indo-Aryan Compound Verb: 1300-2000.” Paper presented at the

9th conference on “Conceptual Structure, Discourse and Language (CSDL9)”, Case Western Reserve University, Cleveland, Ohio, USA. 18-20 Oct., 2008.

⑤Prashant Pardeshi. 2008a. “Synchronic exploration in search of diachronic paths: An areal-typological study of the grammaticalization of “PUT/KEEP” in Northeast, Central, and South Asian languages.” Paper presented at the 4th conference on “New Reflections on Grammaticalization”, University of Leuven, Leuven, Belgium, 16-19 July, 2008.

⑥Prashant Pardeshi, Peter Hook and Sung-Yeo Chung. 2008a. “The influence of genre on the occurrence of the compound verb: A case study from Hindi, Marathi, Japanese and Korean.” 関西言語学会第３３回大会 (2008 年 6 月 7-8 日、於大阪樟蔭女子大学).

⑦パルデシ・プラシャント. 2007. 「放っておけない「Ｖ－テオク」構文―東・南・中央アジア諸語における「PUT/KEEP」の文法化の記述的研究―」日本言語学会第１３５回大会 (2007 年 11 月 24-25 日、於信州大学).

⑧Prashant Pardeshi, Peter Hook, and Sung-Yeo Chung. 2006. “In Search of Origins of the Compound Verbs in Marathi.” Presented at the South Asian Linguistic Analysis (SALA)-26 Conference, Central Institute for Indian Languages, Mysore, India, 19-21 Dec., 2006.

６．研究組織

(1)研究代表者
PARDESHI P.V.(PRASHANT PARDESHI)
神戸大学・人文学研究科・講師
研究者番号：00374984

(2)研究分担者
鄭　聖汝 (SUNG-YEO CHUNG)
大阪大学・文学研究科・講師
研究者番号：60362638

(3)連携研究者